
ドラゴン・シーフ

リュウセイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴン・シーフ

【Nコード】

N1053C

【作者名】

リュウセイ

【あらすじ】

世界にまだ魔法が存在する時代に生きる8歳以前の記憶が無い盗賊リュウ。仲間（家族）と仕事をするうちに1人の少女に出会う。これをきっかけにリュウは世界の秘密に触れることになるのだった。

プロローグ：夢

変な夢を見た。

とても・・・とても変な夢。

気がついたらそこは全面真っ白な所にポツンと俺がいた。

そしたら突然青い髪の子が声をかけてきたんだ。

さっきまでは誰もいなかった筈なのに。

その女の子は初めて見る顔だったけれど。どこか懐かしい気がする。

その声は暖かく。でもどこか哀しげな声だった。

君は誰なの？

「俺はリュウ。リュウ＝トラングル」

何をしているの？

「盗賊をやっているんだ」

それはどんな仕事？

「物を盗むんだ。金だったり宝石だったり・・・色々」

それは大変？

「ああ、たまに命を賭けたりもする」

君に家族はいるの？

「いる……って言うのかな。俺は拾われたからな……血は繋がってないけど大切な家族はいる」

君は誰だと思っ？

「さっき言ったろ？俺はリュウ＝トラングルだ」

そんなこと言いきれるの？

「そりゃそうだろ。俺はここにいるんだ」

それならもし君が君じゃないって知ったらどうする？

「変な質問だな。どうなるんだろう？俺でも分からない」

それじゃあ最後の質問。君は何のために生きているの？

「それは」

ここで夢は終わった。

俺は最後なんて答えたんだろう。

そこ以外は鮮明に覚えていたのだが、そこだけポツカリ抜け落ち

ていた。

ボーっとしていると部屋の外からドタドタと足音が聞こえてきた。

「ストラだ。リュウ、起きてるか！」

「あ、ああ。起きてるよ、なあストラ。俺って何のために生きてんのかな？」

「はあ？ 寝ぼけてないで早くしろ！ また親父にどやされるぞ」

「うお！ ちょ、ま、まってくれよ！」

俺はストラに無理やり手を引かれ俺達の親父の所に向かった。

プロローグ：夢（後書き）

俺は俺のために生きる。

それじゃダメなのか？

1・家族

「お、来た来た。兄貴達遅いぞ。」

そこにいたのは俺らの親父じゃなかった。

血は繋がってはいないが俺の大切な兄弟達だ。

長男が俺の隣にいるストラ。面倒見が良くしつかりしている。

その下の次男が俺。活発で目立ちたがり屋。(と言われる)

で、コイツが末のランス。ドジで臆病。

三男のシンは・・・

「あれ、シンは何処だよ？」

「ああ、シン兄ならさつきからそこに・・・」

ランスが俺達の背を指差すと闇から不気味な人影が出てきた。

何年も一緒に暮らしているがこれになれることは難しい・・・いや、不可能のようだ。

「うわ！ 脅かすなよシン！」

いることを知っていたランス以外の2人は軽く悲鳴を上げる。

初めての人なら気絶する奴も出るかもしれない。

それほどコイツは怖い。顔立ちは綺麗なのだが被っているフードがなんともいえない不気味さをもし出している。

見ての通り、コイツは暗い。とにかく暗い！ てか怖い！

「これ・・・」

シンの手には紅茶が入ったティーカップが握られていた。

「あ、ああ、すまん」

「あ、ありがたくもらうぞ」

根は良い奴なんだよなあ。とか思いつつももらった紅茶をすする。

あ、これおいしい。

「で、親父は何処だ、親父が遅刻なんて砂漠に雪が降るんじゃないのか？」

とにかく親父は時間を守らなかったことが無い。

集合時間まで残り10秒だ。

9

8

7

6

5

4

3

2

1

ゼ 「ドーン!!」

ゼロと言いかけた瞬間。奥の扉を突き破り変なきぐるみを着た大男が入ってきた。

「うおおおん！ 俺の名前はクマキング!!」

いや、そのネーミングセンスはどうだろう・・・ってかそれクマだったんだ。へえー新しい発見だあ・・・じゃなくて!

「親父。なにしてんだよ・・・好い年してきぐるみはねえだろ!」

「親父なんてしらねえな! とにかく俺と戦え!」

クマキング(おそらく親父)は手に持った棍棒を振り上げ襲ってきた。

「ったく。親父は何考えてんだか・・・」

「とにかく戦うしかなかるう」

「・・・面倒」

「ええええ! 戦うの? 怖いよ俺・・・」

クマキングが振った棍棒は誰にも当たらなかつたが。

その攻撃から繰り出される風圧は凄いものがあり。

自分の子供に振れるような攻撃ではなかつた。

あつ。いや、例外がいた。俺らの親父はどんな時も手加減できなかったつげ。

考える暇は無い。0.2秒後には直撃すれば骨が折れかねない攻

撃が飛んでくる。

端から見ると闇雲に振り回しているように見えるが、ちゃんと相手を捕らえた動きだししかも急所を・・・

「「「殺られる!!!」「」」

全員がそれを悟った。

親父だろうとクマキングだろうと関係ない、とにかく動きを止めるっ。

ランスは怯えて隅で「がんばれー」と言っていて。シンは「我閉せず・・・」と天井にぶら下がっている。

「・・・あいつ等あとで料理してやる」「

2人は堅く誓った。

リュウは双剣をストラは短剣を鞘から出す。

そして次の瞬間。2人は消えた。

ただ動き回っているだけなのだが常人が見たのなら消えたように見えるだろう。

「くっ。どこだ!」

「クマキング。後ろだぜ」

クマキングはしまったと後ろを振り向くが遅かった。

リュウとストラはクマキングの横を通り過ぎる。

2人はそれぞれの剣は鞘にパチンと納める

それと同時にきぐるみの部分だけ剥がれ落ち、正体があらわになる。

やっぱり中身は親父だった。

「ちっ。俺の負けだあ」

1・家族（後書き）

「負ける気は無かったんだがなあ・・・」
「いや、あんたが勝ってたら俺ら死んでたから・・・」

2・作戦会議

縦にも横にもでかくて毛も濃い例えるならば熊のような大男。

それが俺達の親父。ガールス「トラングルだ。

「ちつ、まさかお前達に負けるなんてな・・・俺ももう引退かもしれないなあ。がっはっはっは！」

そこは笑う所じゃないだろ・・・おい。

声には出さずにストラが代わりに喋りだした。

「親父はきぐるみを着ていたんだ。視界なんか半分も見えてなかったんだろ、それに親父・・・手加減してただろ？」

これに親父は「うっ」と仰け反った。凶星だったらしい・・・。

凶星！？

「お、親父が手加減！？ そんな言葉親父の辞書には入ってないだろ！」

しまったと思った時はもう手遅れだった。親父の「手加減無し」の拳骨が流星のごとく俺の頭に落ちてきた。

「　　つてえ！」

「・・・まあ、たしかに俺は手加減なんか大嫌いだ。だがな、そんな変な意地を張って大切な家族を殺す訳にもいかねえしな。はっはっは！」

あれで手加減ですか・・・。

声には出さなかったが、全員心の中でそう呟いた。

「いてて。そ、それじゃあなんでいきなり襲ってきたりしたんだよ」
返答は実に単純だった。

「そりゃ、お前。お前らの実力を測るためだろうが」

たんなる気まぐれ。だそつだ。

「まあ、お前らの強さは分かった！ それなら今回の仕事も大丈夫だろう」

親父は「ごそごそと何処からともなく取り出した大き目の用紙を机

一杯に広げだした。

「これは？」

ランスがヒョコつと顔を出し用紙を確認するが何だか分からないようだった。

「これは、ストレイツェル王国の王都にあるルネリア城の地図だ。今回はこの城の中にあるお宝をいただく！」

これには4人全員ガバツと身をのりだした。

「ス、ストレイツェル王国と言えば世界の3大陸の1つを占める大国じゃないか！ しかもルネリア城と言えば盗賊の中でも警備が厳重で有名って……」

後を続けようとしたストラの声をリュウが遮った。

「だ・か・ら・こ・そ。狙うんだよ！ なっ親父！」

「おうよ！ 俺ら家族が力を合わせりゃ怖いもん無しさ！」

「俺達に盗めないものは無い……」

「え、ええええ。ぼ、僕は怖いんですけど……」

ストラとランス（特にランス）は反対だったが。親父は一度決めたら絶対折れない人間ということを知っていたので渋々承諾する形になり、全員自分の定位置に座った。

「よし、それじゃあ作戦会議を始めるぞ。作戦はこうだ。今日、ルネリア城で王女の結婚だから警備が手薄になる筈だ。そこでだ、宝物庫にはリュウとランスで忍び込んでもらう」

「……まあ、俺が選ばれたまでは良いとしよう。あまり多人数で行かずに2人で行動するのも良い。」

だがなぜそこでランスを選ぶ？

もしかやと思い、ゆっくりランスの方を見てみたら……

目に見えておもしろい震えている。手、足、体、顔。そこだけ地震が起きているのかと勘違いするほど震えていた。

「お、親父。これを見てもランスを連れて行くのか？」

黙ってうなづく。

「ぼ、ぼぼぼ、僕なんか、そそそ、そんな役目。無理無理無理無

理！ 絶対無理！！」

今の言葉をきっかけに部屋の端へと猛スピードで移動して、無理無理無理とだけ呟いている。

ランスはいつも仕事の前はこんな感じなのだが。今回は特に酷い。見てられない。

すると親父は席を立ち。ランスの所へ歩き出した。

「おい、ランス」

ランスの体がビクツと反応したが、体は回さない。

「な、なに？」

「お前はもう立派な盗賊だ。リュウは知らんが、シンモストラも俺も全員認めている。それにな、この世界に捕まるのが怖くない奴は1人もいないんだ」

「へっ、俺は怖くないぜ！」

親父は俺に背中を向けたまま指を指しながら話を進めた。

「ああいうのはただの馬鹿だ。ああいう奴は長生きしない。お前は臆病ではある・・・が、それ故に慎重に行動できるのは1種の才能なんだぞ？」

だからお前は馬鹿なあいつのストッパーになるんだ。

親父の考えはこうだった。リュウのストッパー役はいつもストラがやっていたのだが、今回は技術はあるが経験が足りないランスに実力、経験共に認めている（精神面に難があるが）リュウと一緒にやらせて、実戦経験を積ませようというのだ。

そんなこんなで作戦は決行へと着実に進んでいった。

丁度その時、ストレイツェル王国のルネリア城ではある事件が起きていた。

2・作戦会議（後書き）

「まだ僕はやるとは言っていないんだけど・・・」

3・運命の時計台

国のために生まれ

国のために育ち

国のために学び

国のために生きてきた

そして今日。国のために他国の王子と結婚することになる。

今まで、いやこれから私国のために生きることになるのだろうか。

それが私、ミラエスタ「ストレイツェルの、1国の王女の運命なのだろうか……。

この前まではそう割り切って生きてきた。だが最近……7日くらい前から変な夢を見続ける。

私と同じくらいの少年が私に色々質問してくる夢。その中の一言。それが私にこれまでの生活に疑問を感じ始めた。

君は何のために生きているんだい？

私がこれに答えようとする所で夢が終わった。

それが不思議なことに「国のため」と答えようとしたのだが声が出なかったのだ。

これは私にこのままではいけないと訴えかけているのではないか

? そう思い始めていた。

運が好いのか悪いのか。この階は警備は手薄だ。っと思っても地上数十メートルはあるだろうこの場所では忍び込もうとしても無理だろうという所からの配慮だ。

部屋の外には誰もいない。今なら抜け出せる。

一応すぐにはばれない用に顔まで隠れるロープを身に纏った。これで準備は完了だった。金目のものは何も持つては行こうとはしない。これまで生きるのに不自由なことはなかったし、外へ出向くことなどほとんど無かった。それ故、外での暮らしなんか全然知らなかった。

ミラエスタ「ストレイツェル。初めて親に・・・国に背くときが来た。

あれから数十分はたっただろうか。やっと城の者たちはその異変に気づいたようだった。

「お、王女様がいなくなつた!」

「どこかの賊に誘拐されたのか!」

「わからない! とにかく何処にもいないんだ!」

この騒動はすぐさまに王と王女のもとに知れ渡ってしまった。

「ふむ・・・」

王は意外と落ち着いていた雰囲気だった。いずれこうなると思つたといつた顔つきだ。逆に女王の方は怒りをあらわにしている。

「な、なんですって! 早く見つけ出しなさい! 式まであと半日もないのよ!」

古典的にもハンカチを加えて「キィィー!」とやっている。王はそれにも動じない。

ただ小声で。

「あいつもまだ子供だ。まだ色々知りたい年頃だろうに……。この国を抜け出してもらっても構わないと私は思っているのだがな」
誰にも聞こえない声でそう呟いた。

ルネリア城

ルネリア城下町

そんな騒動が起きている最中。ある5人の盗賊団はここ、ルネリア城の城下町に到着していた。ルネリア城下町は式の準備だから大いに賑わっていた。

「つかあ〜！ まさかこんなに早く着くとは……。我ながら「俺達の飛空挺」には惚れ惚れしちまうねえ」

親父は頭に手を当てて「がっはっは！」といつもに用に笑っていた。

「それはそうと親父。早く到着しすぎたみたいだ。まだ作戦決行まで10時間以上あるぜ？」

ストラが問う。

「そうさなあ……」

数分考える。あるいはただ焦らしているだけかもしれない。

「……よしっ、お前ら自由にきていいぞ！ 作戦決行までには戻ってこいよ」

遅れたら拳骨な！ と付け加えたが誰も聞いて（耳に入れようとしないで）いない。

これには誰も反対するものは無く、ストラまで小さくガッツポーズ

ズをし、シンは何も言わずに消えていった。

「んじゃあ俺はあのデツカイ時計台にでも行ってみるかな。あそこ
の風は気持ちよさそうだ」

リュウは特にやることも無いので時計台に上りそこで昼寝でもし
ようかと思っていた。

他の奴等ももう姿は見えない。リュウは腕を伸ばし、あくびをし
ながらとぼとぼ歩いて時計台を目指す。

「といつても。高だか姫さんの結婚ごときで張り切りすぎだろここ
の連中は・・・」

歩きながら思う。そんなに張り切っても誰も見向きもしないだろ
うに・・・。

その後も飾りに飾られた町並みに呆れながら、とぼとぼよたよた
・・・。

気づいたら巨大な時計台のすぐそばまで来ていた。近くで見ると
余計高く見える。

中は梯子で登れるようになっていた。梯子でこの高さを上るには
少々骨が折れるな。とは思ったものの自分を引き止めるまでには至
らなかった。

登り始めて数分経過

「 4 5 , 4 6 , 4 7 , 4 8 , 4 9 , 5 0 . . . つ、ついた . . . 」

頂上まで丁度50段。流石に堪えた。

時計台の頂上。柵は高めに作っており、これと言って目立つもの
も無い。作業員が時計の整備等で使うための頂上のように人はあま
り来ないようだ。

だが、そこには1人の少女だけいた。フードを被っていて顔は好
く見えないが、こちらにはまだ気づいていない様子だった。そくと
近づく・・・。そして

「おつす！　ここまで登るのは大変だけどいい景色だなあここ」

しかし、返ってくる言葉は無かった。一瞬だったがとても驚いたような表情をした。その驚き様は不思議に感じたがすぐその顔は消えその後は警戒するような目でこちらを見ていた。

「まさか……。私を捕まえに？」

透き通るような声音で問う。もちろん何のことだかさっぱりだ。

「へ？　ツカマエル？　そんなわけ無いじゃんか。俺はただこの風は気持ち好いと思って来ただけさ」

「風を？」

「そう。風」

謎の少女はもう一度「風……」と繰り返す。

「それじゃあ、追っ手では無いのですね？」

ああそうだ。と答えたら彼女は安心したのか大きく息を吐いた。

そこでやっと被ったフードを脱いだ。暗くて見えなかった顔が鮮明に見える。

腰の辺りまであるだろうと思う青く輝く髪。全てを吸い込みそうな深い色をした蒼い瞳。

間違いない。夢で見た少女だった。

3・運命の時計台（後書き）

この出会いが。世界を揺るがすことになるとは誰も知るはずが無かった。

4・紅茶の香りは危険な薫り

賑わいに賑わうミネリア城下。そこに四兄弟の長男。ストラットランゲルがいた。

「おーおー。どこ見ようが飾り飾り飾り・・・ああ、いいよな。祭りって・・・」

その性格からは予想がつかないほどストラは祭りが好きだ。町中が熱気に溢れるこの感じは堪らない。

しかし、この趣味が自分の性格とは不釣り合いなのは自覚している。だから兄弟の前では隠してきたつもりだ。

それにしてもここは店が沢山並んでいる。商店街かなんかか？

そう見回していると一つの店に目が留まった。正確にはその店にいる1人に。

「シン・・・？ 何しているんだ」

声をかけると確かにシンだった。妙に慌てている。

「紅茶が切れそう・・・」

最小限の言葉での説明だった。

そういえばこの店から紅茶の香りが混ざり薬っぱいっくんとした匂いが出ていた。紅茶は好きだがこの何とも言えない香りは・・・

シンは何時も飲んでいる安物と香りが気に入ったのか、少し高めの物を購入した。

紅茶が入った包みを貰うと、ただ一言。

「ファミリアアス飛空艇に・・・戻ってる・・・」

そう言うのと返事を返す前にシンは消えていた。あいつは諜報と工作に向いているとつくづく思う。実際にあいつの情報等に何度か助けられた。ただそんな隠密活動をこなす所為か、無意識に気配を消していたり、いきなり横に立っていたり。心臓に悪い奴でもある。

根は好い奴なんだよなあ・・・。とか思いつつ、つくんとした匂いを後にする。

街を彩る装飾を見物しながら歩いていると、遠くの方で人の大群が来るのが見える。一瞬パレードか？と期待に溢れたが違った。

「あれは・・・なんだ。王国の騎士達じゃないか・・・」

白金に輝く鎧をガツシャガツシャ音を立てながら街の大通りを歩いて回る。どうやら何かを探しているようだ。だが、ストラは興味を持たない。自分には関係無いっす。と言わんばかりに目をそらし騎士達とすぐさますれ違った。

数時間後この大群に追われることになるとも知らずに

ストラ ランス

一方 。

こちらも賑わいに賑わうミネリア城下。そこに四兄弟の末っ子。ランスとトラングルがいた。

「あわわわ。ここ何処？ 私は誰？」

私はランスとトラングルです。ここは何処だか全然わかりません。と自問自答。一種のパニック状態です。

ランスは初の大仕事を任されたことで不安。迷ったことで不安。

不安×不安!!パニック!!

と言う公式が頭の中で出来上がっていた。

ランスはこれまで補助位しかやったことがなかった。逃げ道確保、外からの下調べ等だ。もちろん盗みの最前線にたったことはない。今日が初めてになる。

その不安から上の空になり、よって迷子となる。そして上の公式の出来上がり。

等ということをしてランスは声に出してぶつぶつ言っていた。かなりの重症です。

「そ、そういえば。リュウ兄が時計台に行くとか言ってたような・

」

兎にも角にもこのままでは家（飛空艇^{ファミリアス}）に戻れなくなりそうなので。時計台に向かうことに決めた。あのばかでかい時計台はいくら方向音痴なランスでも見失うはずが無かった。

向かう途中、一人の青年に出くわした。というかぶつかった。

瞳の全てを燃え尽くしそうな紅はどこかで見た気が……。あ、リュウ兄も同じ紅色の眼をしてたっけ。

「あ、すいません。怪我はありませんか？」

明らかに向こうが突っ込んできてこちらの方が大きく飛ばされたのだが。面倒はごめんなので謝っておいた。

そしたら向こうも謝ってくれた。よかった、好人そうな人で。

「……急いでいる様でしたがなにかあったんですか？」

青年はとても言いにくそうにしていた。言おうか言わまいか迷っているようだった。

「実は……人を探しているんです。この方なんですけど……」

写真を見た瞬間仰け反った。か、可愛い……。

「おっと、申し遅れました。私、ゼロ!!エルディアンともうします」

「あ、僕はランス!!トラングルです。どうもご丁寧に……ん？」

エルディアン。えるでいあん……エルディアン!? エルディアンと言えば三大国に入らないまでもとても資源に溢れた国じゃな

いか。そしてゼロといえばその王子でストレイツェル国の王女、ミラエスタ姫との婚約をしているとても偉いお方じゃないか！

やばいっ！ 一国の王子に尻餅を付かせてしまった！ 下手すれば捕まるっ。

あわあわしていたのに気づいたのか。大丈夫ですよと言ってくれた。ああ、なんて慈悲深きお方。

つまりこのえらく美人のお方はミラエスタ姫・・・？

「僕・・・ストレイツェル国が好きになりました」

正直にいいすぎたと後で後悔。

そんな言動もゼロさんは許してくれた。

「一国の王子ともある人がお供をつけないんですか？」
数秒の沈黙、そして。

「実は抜け出してきたんです。止められたんですけどね」

爆・弾・発・言。この人は「あ、言っちゃダメでした？ やつぱり？」と言う顔でこちらを見る。見た目よりどじなんだな、この人は。

「でも、婚約者の為ですもんね。好きになった人の為って言うなら分かります」

この言葉が後に後悔することになった。

ゼロは眼を輝かせて。そうですね！ と手を思いつき掴んで振ってくる。それじゃあ一緒に探してください。一人じゃ不安でしょうがなかったんですよ。とぶんぶん振りながら言ってきた。

やつちまったー！ 心の中で自分が叫ぶ。ここまで来て下がれない。しかも一国の王子、後の王に今逆らったら・・・。汗が額から流れる。

ランスに選択の余地無し。

「そ、それじゃああの時計台に言ってみませんか？ 兄貴がいると思いますし。高い所から探すのも悪くないかと・・・。」
しどろもどろなんとか提案を出す。

「そうですね。行ってみますか！」

後に敵になることも知らずにただランスは笑う

4・紅茶の香りは危険な薫り（後書き）

全ては繋がっているんだ

5・知らぬことは罪深きこと

「　　でさあ。その部屋に飛び込んだらいきなり銃を突きつけられてさあ。あと少し避けるのが遅かったら俺はここに居なかった訳よ」

　　どんなにつらいことがあっても長い年月がそれを笑い話に変えてくれる。一種のトラウマと言うもの意外は…だが。

　　リュウは数年前大富豪、メルテル一族の屋敷に忍び込んだ話をしていた。

　　相手はミラエスタ「ストレイツェル。この国の王女にだ。

　　もちろんリュウはそんなこと知るはずも無い。名前は偽名を教えただからである。

　　そんなことも露知らずリュウは巧みな話術で王女の心を捕らえていた。

　　「リュウさんのお話、とても面白いです。もっと聞かせてください！」

　　「そ、そうか？　そこまで聞き入るほど面白いとは思わないけど…」

　　王女は、そんなことないですつ。と首を横に振る。少し躊躇ためらいながらもリュウが話の続きをしようとした、その時。

　　誰かが梯子を上ってくる音が聞こえる。しかも二人。

　　王女は少し警戒をしていた。がそれもすぐに解けたようだった。

　　「おう！　くつろいでるか。譲ちゃん」

　　「紅茶：持ってきた」

　　登ってきたのは、親父ガレスとシンだった。言い忘れていたが、ここはファミリアスファミリアスの飛空艇だ。

　　一方。ランスとゼロはと言うと

ファミリアリアス
飛空艇

時計台

「あれ？ 誰もいないや。すみません、こんな所まで来させちゃつて」

時計台はもちろん空っぽ。ランスは申し訳なさそうに頭をかいた。「あ、いえ。付き合せたのはこちらですし…こちらこそすいませんね」

あ、いえいえこちらこそ。という会話が何往復か続いた。この二人は性格が似ているのかもしれない。

このまま会話を終わらせると嫌な沈黙が出来そうなのでランスはある提案を出した。

「よかったですら、家に来ませんか？ 兄達も手伝ってくれると思いますよ」

金を取られるかもしれないですけど…と付け足す。よかった聞かえてなかったみたいだ。

ゼロはその意見に賛成してくれた。位置も大体つかめたし、もう迷うことはないだろう。

あのもの凄く長い梯子を降りるのだけが少し怖かった……。

時計台

ファミリアリアス
飛空艇

ランス達がこちらに向かっているところ。リュウ達は話に盛り上がっていた。

「でよう、拾ったばかりのこいつは自分から罠に飛び込んで行ったり、失敗するとわんわん泣いたり…とんでもねえガキだったぜ本当に！」

「う、うるせえな！ その話はすんじゃねえって」

テーブルを囲んで紅茶をすすり、ケーキをつまみ（ランスのおやつ）正に話に花が咲いている状態だった。

王女はすっかり打ち解け、リュウとガーレスの会話に腹を抱えて笑っていた。

シンもその部屋の隅によっかかり話を聞いている。時折口元が笑っていた気もする。

そんな昔話に盛り上がっているころ、長男ストラは帰ってきた。

「帰ったぜ…って誰その…綺麗な人」

リュウはこれまでの経緯を話した。ストラは驚きの顔に満ちている。

リュウが…女の子を口説いて連れてきた？ そんなのありえない

！と言った顔だ。

「なんだよその顔は……」

「あ、いや、すみません。あまりにもありえない話だったもので…
つい敬語になってしまった。いや、リュウももうそんな歳かあ。

青春だね、うん。

つい親父臭いことを考えてしまった、自分もまだ青春真っ盛りなんだが。（リュウ16歳、ストラ17歳）

そんなことを考えていたら、ストンツと何かが自分の足元にささった。

あ、包丁だーわあ…すっげえあぶねえすっげえ怖え。

「兄貴だつて、連れてきたことないよなあ」

「いやいや、何回かあった気がしますがなにかあ？」

「そうそう、腰を痛めた老人と雌犬は含みませんのであしからずう」
語尾を妙に上げる二人、笑顔で喧嘩してるのはなんとも不気味だ。

「やめんかこらっ！ お客さんの前で何やってんだ！」

親父の流星拳骨炸裂！×2

「~~~~~！」

声になつてないうめき声を上げる。ストラは久しぶりだったので
尚更効いた。

ついでに人前で殴るなよ…。と言り返す奴はいない、皆命が惜しいのだ。

そしたらいきなり、ああああっ！ とストラは叫びだす。痛みで
気が狂ったか？ と思つたが違う。ストラは続けた。

「ど、どどど、どこかで見たとあると思つたら。その女の子…
じゃない！ その御方は…」

ストレイツェル王国の王女様ではないか！ そう続ける。

全員王女を見る。本人が気まずそうにしているのが嘘ではないこ
とを裏付けた。

あゝこりゃ打ち首もんだよ。やばいつて、今日結婚式じゃないか
…こんな誰が見たつて誘拐したように見えちゃうつて……。

王女を除く全員リュウを見る。いや、にらんだ。その物全てを否
定しているような軽蔑の眼と怒りの眼が交ざつて、その視線はとて
つもなく痛かった。

「お、俺の所為…だよな。ああ、どうしよう…」

王女はオロオロした様子。完全に身分知られてしまつて混乱して
しまったのか、衝撃の言葉を発した。

「わ、私をこのまま連れて行ってはくれませんか？」

「~~~~~はい？」

そんなのダメに決まってる。んなことやつたら、全国指名手配
犯に……つてもうなってる用なもんか。

それでも一国の王女誘拐って…流石にやばいだろっ？

部屋中に深い沈黙が続く。

その沈黙を破ったのは……。

「今帰ったよ」

ランスだった。

梯子を登る音が聞こえる。あれ、ランスだけじゃ…ない？

瞬時に全員の頭によぎる物があった。

「……まさかあいつ！ 王国騎士なんかでも連れてきてるんじゃない

…！」「」「」

王女にはとりあえず隠れてもらうことにする。

この後、一つのちっぽけな飛空艇に二国の王子と王女が乗ることになるのは数秒間後の話。

5 ・知らぬことは罪深きこと（後書き）

危険な足音が近づく……

6・仕事をしている暇も無し

「でわ、忙しい所すいませんでした」

ゼロは飛空艇ファミリアスを後にした。

エルディアン王国の王子がランスに連れられてきた時にはどうしようかと思ったが、なんとか切り抜けられたようだ。

ゼロの姿はもう見えなくなったのをストラが確認する。

「親父……どう思う？」

答えは分かっている。だがあえて聞くことにした。

「……ばれているな。確実に」

全員やっぱりとため息をついた。現状を把握出来ていないのはランスただ一人。

いや、もう一人いた。

「どういうことですか？」

事件の発端。ミラエスタ王女だ。

「譲ちゃ……いや、王女さん」

親父は出来るだけ分かりやすく説明しだした。

「つまり、あんたがここに居たことがばれてしまったのです。あのゼロって男はあんたがここに居たことを知って帰ったんですよ。そして、城に報告へ行った。自分一人では王女に逃げられると思ってね」

もうすぐここに王国軍が来るはず……。

そう、もう王国にはばれてしまっている。ここで王女を帰した所で確実に追われる事になるだろう。

全体が重い空気に包まれている。そんな中に場違いな叫び声が響き渡った。

「へっ？ えっ？ なんで写真の子がこの飛空船にいるのさ。それにはれてるってやばいじゃんか、もうすぐ王国軍が来るって……早く王女様をお返ししなきゃ！」

「嫌ですっ！」

王女がこれまでにない血相で叫んだ。そして小さい声で続ける。

「私は、これまで世界がこんな広いことを知りませんでした。城に閉じ込められて。決められたことしか出来なくて。そして今日、国のための道具として結婚することになっていました。それが運命だと私は割り切っていました。だけど……。」

だけど、彼方達に出会って、話して、笑って、世界がどれだけ広いかを知りました。

もう一度お願いします。私をこの国から連れて行ってください！
全てを言い切った後。王女は顔を赤くし、息を切らしていた。これほど自分を主張したのは初めてなのかもしれない。

最初に連れて行けと言われたときには何があっても断るつもりでいたが、今は違う。

「世界が知りたい……か。確かに俺たち盗賊は世界中を旅するな」

「世界を旅したいから盗賊になる奴なんて聞いたこと無いぜ」

「なに、野郎共ばかりでむさ苦しいって思っていたところだ。丁度いいじゃねえか」

「ま、まあもともと追われる身だしね…綺麗な子がいるのは嫌じゃないし……」

「……構わない……」

全員、ミラエスタを乗せることに曲がりなりに賛成した。

「てめえら！ もうすぐ騎士共がここに来る。決まったらすぐに出発だあ！ 総員持ち場に着けえ！」

「おおっ！」

ガールズの豪快な怒鳴り声に全員一斉に動き出す。つとその時。

「おおっ！ 皆、王国騎士がすぐそこまで来てるよ」

不運なことに王国騎士の軍がそこまで迫っていた。

むこうは迷いなど無く、まっすぐこちらに向かってきている。

数は百数十人かそこら…とても5人じゃ太刀打ちできない数だ。

「おう！ ストラ。魔動力炉はどうだ」

「ああ、問題ない！ だけど出発まで十分はかかるよ」

この世界の飛空艇はほとんどが魔動力。つまり魔法の力で動いている。

魔法といつても直接対象者に致命傷を負わせれる術者は少ない。

大体は剣や槍に魔法をチャージするものが主流だ。

飛空艇もその応用で、魔法をチャージした動力炉つまり魔動力によって動くわけだ。

普通の動力炉でも多少は飛べるが、魔法を使ったものと比べてスピードが出ない。

飛空艇には魔動力炉は無くしてはならないものなのだ。

つと説明しているうちに騎士達は立ち止まった。後方から何かを運んできている。

「ありやあなんだ…？」

ガールズが眼を細める、でっかい筒に車輪がついたあれは…。

「つ！ 馬鹿なっ！ 大砲だと!？」

事実、それはどう見ても大砲だった。

しかもそれに点火…つまりこちらに打ち込もうとしている。

まだこつちには王女がいるんだぞ？ なぜそんなことをしようとしているんだ。…まさか、向こうは気づいていないんじゃないか？

その可能性は皆無だった、この国ではまだ俺達の盗賊団は指名手配なんぞされてないはず。向こうが攻撃してくる理由がない。…

つと言つことは…。

王女がいることを知っていて攻撃してきている？

信じられないがそれしか考えられなかった。

そして、小さな岩ほどもありそうな砲弾が飛んできた。

直撃。そして大きな振動。

あの砲弾の大きさからは考えられない爆発音が響いた。
こんなのを何発も耐えられるほどの飛空艇は頑丈に出来てはい
ない。

「……任せる……」

シンが席を立つ。彼の身長ほどもある銃を持って。

6 ・仕事をしている暇も無し（後書き）

盗賊団の運命は無口な男とその得物に託された。

7・魔動力生命体

出発準備完了まで残り12分。

ここは飛空艇ファミリアスの甲板。

そこに一人、自分の身長ほどもある銃を構えるフードの少年、シン・トランゲル。彼はファミリアス盗賊団の諜報・工作係であり狙撃手である。

一見、黒いフードに鼻まで隠れる黒いマスク、切れ長の鋭い眼は無愛想をそのまま具現化したような見た目で（実際そうなのだが）初対面の相手ならば多かれ少なかれ警戒することだろう。

だが、そんな彼に仲間達はとて重大な役目を与えた。飛空艇を大砲の砲弾から守る。

簡単に言ったがそれこそそれなりの実力を求められる役目。それに彼は細長い銃一丁でこれらから守ろうと言うのだ。

「……ふん……」

「……二……全部で五台か……」

ジャキツつとシンは暇な時に手入れをする時のように銃を構える。それと同時に黒く光る砲弾がもの凄い勢いで打ち込まれてきた。だがそれは中途半端のところでのその爆発音が響き渡った。

騎士達の方から見たらただ失敗したようにしか見えなかつただろう。だが違う、シンがその細長い銃で撃ち落したのだ。

風向き、距離、砲弾スピード、様々な計算のもとやっとできる業だった。

情報をよみ、戦局をよみ、空気のように気配を消す。これらのことから、西の大陸でシンは「風詠みの神かぜのうたのしん」との異名で知られていたりもする。他の仲間にも異名はあるのだがそれはまた後で説明しようと思う。

それからシンは王国騎士達の砲弾をことごとく打ち落としていた。

仕舞いには弾切れらしく、それにもはや痺れを切らした王国騎士の隊長らしき人物が怒鳴りだした。

「ええい、役立たずどもめ！ もういい「あれ」を打て！」

王国騎士の集団の動きが一瞬止まる。

「は、はっ！」

しかしそれだけだった一人の返事と共に全体が忙しく動き出した。遠くで良く見えないが、後ろの方からまた新しく大砲が顔を出す。

ただ一つだけ違う所があった。その大きさである。

今まで使っていた大砲の3倍はあるんじゃないかと言うほどの大きさだった。

大きさが変わった所で何も変わらないとシンは思ったが、それは違った。それから放たれた砲弾は飛空挺の遙か上空。

打ち落とす必要がないと思いつめていたらその砲弾に異変が起きた。

砲弾は命が宿ったかのように動きだし人型に変化をさせた。

「……魔動力生命体……？」

魔動力生命体とは名前の通り、魔法の力で動く生命体である。

それは物であったり、動物であったり、魔物であったり……。

儀式さえ行えばどんな「もの」であろうと魔動力生命体にするこ
とが出来る。

見るからにしてこれは多分石に魔力を注入したものだろう。

そいつは眼、口、足、手……物質からできた魔動力生命体にしては
芸が細かい。まさに「石の巨人」だった。

その命を持った石の塊は飛空挺に豪快に着地した。

その下ではリュウとランスが騒ぎガールズに怒鳴られる声が聞こ
える。

「てめえら！！ シンを信じて飛び立つ準備でもしてやがれ！！」
などという絶対シンに聞こえるように言ったとしか思えない声が。

シンは小さくため息を吐き、自分の身長ほどもある銃を二つに折り、背中に担いだ。

そして腰からは二丁の拳銃。

「……面倒くさい……」

言い終えると同時にシンは三発の弾丸を「石の巨人」に打ち込んだ。

効果は乏しく、石が数センチ削れる程度である。このまま奴をサラサラの砂になるまで打ち込んでも良いのだが……やっぱり弾丸が勿体無い。

狙うならばやはり魔動力の部分「核」だ。

魔力を注入する時には必ず核が必要だ。それに魔力を定期的に注ぐことによってそれは生きながらえることが出来る。つまりそれを破壊すればどんな強力な魔動力生命体でも一溜まりも無い。

問題は「それがどこにあるか」なのだが……。

奴は飛空艇を壊すより先にシンを標的に定めたらしい。

徐に人間で言うところの手にあたる部分をこちらに突き出した。

その瞬間、シンは何かに気づいたように横に飛ぶ。

ダンッダンッ

二発の石の塊がさつきまでシンがいた場所を通り過ぎた。そして避けられたことも気にせずシンに向かつて石の塊を連射する。

このままでは核を探し当てる暇も無い。

しかもその飛んできた石の塊は元通りにこの「石の巨人」の手に戻っていた。

シンは黙って「石の巨人」を観察している。

多分、核は人間で言うところの頭か心臓にあたる部分に付いているはず……。

だが、そこを銃で狙っても少し削れる程度。その間この攻撃を避け続ける体力はシンには無い。

速攻で決めなければ倒すどころかこっちがやられてしまう。

仲間は呼べない。信じられているんだ、ここは俺がやらなければ。

せめて場所さえ分かれば体の堅さは対処できる。

「石の巨人」は尚も打ち続ける。

石弾の発射スピードは脅威だが本体は鈍い。

シンは一気に間合いを詰める。シンは「石の巨人」の顔面に零距离で射撃しようとした。もちろん無駄だと分かってた。

だが今まで動きが鈍かった「石の巨人」はその巨体からは信じられないほどのスピードでシンを弾き飛ばした。

幸い地上に投げ出されることは避けられたが、右腕に直撃したみたいだ。思うように動かせない。

だが、奴の核がどこにあるか分かった。

シンは自分のポーチから緑色に輝く弾丸を取り出す。

「……使いたくない……」

シンが持っているのは、風の魔力が込められた弾丸。剣や槍とは違い、銃は使う弾丸に魔力を込めなければならない。それ故、狙撃手は金がかかる。

ちなみに飛空艇等の魔動力炉には火の魔力が注がれている。

そしてシンは消えた。次の瞬間には背負った細長い銃を降ろしている。

「……終わり……」

刹那。

と言っには速すぎるかもしれない速さでその弾丸は石の巨人の頭を意図も簡単に貫通した。

もちろん普通の弾丸では貫通なんかせずに弾かれて終わりだった。それを可能にしたのが風の弾丸から繰り出される「瞬く弾丸」インスタント・バレットである。

核は口の中にあつた。性格に言えば頭に。

奴は中が空洞で出来ていた。おそらく何十キロも纏わせたまま動かせるほどの魔力を入れてなかったのだらう。良く見れば着地した

時の衝撃が体の割りに小さかった気がする。

相手を近づかせないために石の弾丸を撃ち。顔に近づいたときだけは動きを早くなるようにしておき（魔力の節約のため）。そして細部までこだわっていたのはそれを隠すため。

よくよく観察すれば良く考えられた。そして欠点だらけの魔動力^{ゴレム}生命体^{レム}だった。

そして、石で出来た魔動力^{ゴレム}生命体は地面に崩れ落ちる。ただの石と化して。

「……ミッション……コンプリート……」

7・魔動力生命体（後書き）

出発まで残り0分。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1053c/>

ドラゴン・シーフ

2010年10月15日22時30分発行